中沢昭二

とうてんこう戦記

とうてんこう戦記

中沢昭二

小峰書店

夏の章……5
秋の章……69
冬の章……125

装幀・さし絵・井口文秀

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

夏の章

1

まい日のように、おおぜいの兵士たちがおたけびをあげ、血しぶきをあびて殺したり殺されたりしていた戦国時代のことです。

土佐のくに（高知県）でも戦につぐ戦がありました。

あつい南国の太陽が、山にも野にもようしゃなく照りつける、うだるような夏のまっさかり……。

くにじゅうに戦をつげるホラ貝がボウボウボウとなりわたりました。

「いくさだ、いくさだ、かっせんだぞう。」

背にさした旗指物をなびかせて、砂ぼこりをあげながら、村々に戦のはじまりをつげて騎馬武者がかけぬけます。

田畑をたがやしていた農夫たちは、その声をきくとその場で、スキやクワをうちすてて槍をつかみ、はだか馬にとびのります。

「出陣だぞ。」

口ぐちにさけび、いっせいにお城にむかってかけつけるのです。

南から北から、東から西からそうしたつよそうな兵士が、ぞくぞくと城にかけあつまってきました。

「みんなよくきけ。」

敵はくにざかいの村をやきうちし、そこに、とりでをきずいたのだと、隊長が戦のじょうきょうを説明しました。

くにざかいをこえるということだけではなく、こちらの村をやいて、そこに陣地をつくられてはもうだまってはいられない。

いまから出陣して、敵の手から村をとりかえすのだ。

「おん敵いちにんも生かすな、みな殺しにしろ。」

隊長がさけぶと、それに和して兵士たちも、

「おお！」

とさけび、いっせいに声をそろえてこぶしをふりあげ、

「エイエイオオ、エイエイオオ、エイエイオオ！」

三たびかちどきをあげました。

そうしてかちどきをあげるのは、出陣まえのならいでした。

夜になり城内にあかあかとタイマツの火がともされました。

たくましい顔、すこしあおざめた顔、明るく笑いとばしている顔、かとおもうと、ひとり考えこんでいる顔、さまざまな兵士たちの顔を、ときおりふく夜風にまいあがる火のこが照らしだします。

兵士たちのなかには、農夫もいましたし、きこりもいました。

漁師もいましたし、大工もいたし、鍛冶屋もいました。

年齢もいろいろです。

しらがまじりの老武者から、まだ、ほおのぽうっと赤い十四、五の少年まで。
でもどの兵士も、じぶんがたたかうことで父や母や弟や妹、妻子のいのちをまもることができる、とそう信じているようでした。
「出陣！」
ふたたびホラ貝がなりわたり、城門が大きくひらかれました。
いよいよ、出陣です。
みんな、それぞれに槍や弓をたずさえ、ワラジの緒をしっかりむすんで出発です。
城門をでると、道のりょうがわには、手に手にちょうちんやタイマツをかかげたひとの波です。
兵士たちの家族です。
あかんぼうを背おった若い母親や、子どもの手をひいた老婆など、るすをあずかるものがじぶんの肉身の名をよんではげますのです。
「りっぱにたたかってこいよ、きっと勝ってこいよ、てがらをたててこいよう。」

隊ごをととのえ、城門からいさましく出陣していく兵士たちを、ひとびとはいつまでもいつまでも見おくります。

「あっ、とうてんこうだ！」

見おくりのひと波のなかから、そんな声がしました。

兵士たちのちょうどまんなかあたりに、四人の兵の肩にかつがれた美しい鳥かごが見えたのです。

鳥かごは、夜目にも赤い朱のかごで、ひとかかえもありそうな大きさでした。

それが黒い台座の上にきちんとのせられ、朱ぶさのついたひもで、台にむすばれているのです。

金と銀のぞうがんでかざられた鳥かごの美しさもすばらしいものでしたが、そのなかにいる一羽の「東天紅」もひとびとの目をひきつけずにはおきませんでした。

四人の兵士にかつがれた、とうてんこうのすぐそばには、やはり金銀でかざられたえさばこをもった老兵がついていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

とうてんこうのせわをする〝お鳥番〟という役目の老人です。
お鳥番の老人は、殿さまの定紋いりのむらさきのふくさをもっています。
ふくさといってもふろしきほどもある大きさで、それは夜になると、すっぽり鳥かごをおおうためのものです。
鳥は、鳥目といって、夜になると目がよく見えなくなります。
とうてんこうがゆっくりやすみ、ねむれるように、そのふくさをかけるのですが、こん夜はとくべつです。
出陣だからです。
兵士たちにも、見おくってくれる城下のひとたちにも、このりっぱなとうてんこうの姿を見せるためなのです。
「うわ！　すごい鳥だ、りっぱなとうてんこうだ！」
ひとびとは、ほうとため息をつきながら、ゆっくりすすんでいくとうてんこうに見とれました。

夜だから、とうてんこうはどうやらねむっているようでした。
それでも、長い首をきっとあげ、あしをふんばり、胸をはってきちんととまり木にとまっています。
とうてんこうはニワトリの一種ですが、ただのニワトリではありません。
黒とふかみどりに色どられた羽はたくましく、首すじから胸もとにかけておびのようにひかっている金色の胸毛、尾羽は、まるで大きな波がしらのようにまるくたわみながら、やはり黒とふかみどりにつややかにひかっていました。
トサカは、炎のように赤く、さきほこった大きな花びらのようにゆたかです。
このとうてんこうなら、なるほど、りっぱなときの声をあげるだろう。
ときの声……、
これは〝時〟つまり時間のことと、もうひとつ、戦にはきまってあげる、あの兵士たちのさけび声〝鬨の声〟とふたつの意味をもっています。
とうてんこうは、このときの声をあげるためにそだてられ、くんれんをうけた鳥な

のです。

とうてんこうの長い長いなき声は、戦に幸運をもたらすと信じられていました。だから、戦のとき、このとうてんこうをつれていき、そのなき声をあいずに、両軍とも戦をはじめたのです。

ニワトリの声は、ほんの数秒なくだけですが、このとうてんこうは、そのなんばいもなんじゅうばいも長いなき声をあげることができるのです。

朝日をよび、ときをつげるとうてんこうは、戦国の武将や兵士たちにとっては、まるで戦に勝って、かちどきをあげているじぶんの姿そのものにもおもえたのでしょう。

兵士たちは、こんなりっぱなとうてんこうがいるからには、戦はきっと勝つだろうとおもいましたし、見おくる家族たちも、みんなかならずぶじにかえってくるにちがいないと信じていました。とうてんこうは、戦の守護神でもあったのです。

そのとうてんこうのあとにつづいて、白馬にまたがった御大将も鎧兜に身をかためて、いさんで出陣していきました。

2

とうてんこうたちの軍勢は、まる一日かかって、くにざかいにちかい戦場につきました。

山がいくえにもおりかさなって、ところどころにふかい谷をつくっている高原が戦場になったのです。

高い山から流れでた谷川が高原をよこぎって、眼下の海にそそいでいます。

その川をはさんで敵味方がむかいあったわけです。

敵は山を背に陣をしいていました。

山の中腹にまっ黒いやぐらを組みやぐらのまわりには、さかもぎといって大きな丸太をけずってつくった柵をかまえています。

よせての騎馬隊のこうげきをふせぐためのものです。

そして、あちこちにタテをそなえ、旗指物が風にあおられ、バタバタとなっていました。

味方のほうはというと、これは、海がとおくに見えるふかい谷を背にしていました。

『ここからうしろへは、いっぽもひかないぞ』

そういうこころがまえです。

味方もやはりたくさんのタテとさかもぎをそなえ、弓隊を最前列におきました。

まず火矢をうちこんで敵のとりでをやこうという作戦でしょう。

弓隊のうしろには、騎馬隊が、そしてそのうしろに槍隊、それから、刀だけの抜刀隊。

それが味方の陣型でした。

弓隊が火矢をうち、とりでがもえはじめたら騎馬隊がかけまわり、こんらんにじょうじて、敵をけちらす。そのあとから槍隊が槍ぶすまでつきかかり、最後に抜刀隊が

とりでのなかにせめこんでいく。

そういうしくみだったのです。

とうてんこうは鳥かごにはいったまま、御大将のすぐそばのまんまくのなかにいました。

御大将は、おおぜいの旗本とよばれるさむらいたちにまもられて、やはりまくのなかにすわっています。

「ごちゅうしん。」

物見というせっこうの役目の兵が馬にのってかけもどってきて、敵状を報告します。

「ただいまおん敵うごくけはいはありません。」

「とりでにこもるおん敵、およそ五百かとおもわれます。」

そんなふうにつぎつぎと報告するのです。

ふたたび夜がふけていきました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.